

## 英語リスニング指導 ハンドブック

鈴木寿一、門田修平 編著

A5判・402頁・  
本体2,900円+税

[評者]

泉 恵美子



### リスニング指導について見直し、 理論と実践から学べる一冊

センター試験にリスニングが導入されて久しい。大学入試も4技能型が導入されるようになり、英語力の向上が益々求められる。しかし、リスニングについては長らくテストがあつて指導がなしと批判されることも多かった。そのような中、不適切なリスニング指導がなされていることに危機感を抱いた編者と、優れた授業実践を積む教員・研究者により、素晴らしい書籍が生み出された。

学習者のリスニング力を効果的に伸ばすための指導法、リスニング力をもとに、リーディング・スピーチング・ライティング力を伸ばすための指導法を、具体的な実践事例とその基盤となる研究や理論を通して学べる良書である。

本書は、400頁余からなるハンドブックであり、リスニング指導について俯瞰的かつ詳細に知ることができる。導入編、実践編、理論編から構成され、導入編では、リスニングの重要性と必要な能力が示されたのち、「リスニング指導自己診断テスト」で各自が授業や指導を振り返ることができる。その後の「リスニング指導Q&A」では、50の質問に対する回答が書かれている。日々の授業

での疑問を解決するヒントが満載で、大いに役立ちそうである。

実践編は11章からなり、音声知覚の指導、小中高における語彙や文法を習得させるための指導や、技能統合型の指導、検定教科書やそれ以外の教材を用いた指導例などが収録されている。個人的には「リスニング力の測定と評価」が興味深く、無料の音声編集ソフトを用いた「リスニング教材編集法」が有難かった。教員が各自の校種や児童生徒を念頭に置いて読めば、より良い指導のイメージが沸き、授業改善につながるはずだ。

理論編では、リスニングの科学としてそのメカニズムやワーキング・メモリー、リズム・インтоネーションなどが取り上げられ、さらに英語習得をささえるフォーミュラについて述べられている。最後にリスニングに関する実証研究の成果、並びに教室での指導への活用法も示されている。

本書の紙面からは、教員や学習者に対する執筆者の優しくかつ厳しいまなざしと溢れる思いが伝わってくる。英語教育に関わっている教員や学生・院生はもとより、英語リスニング力を向上させたいと思っている読者にもお薦めである。是非手元に置いて、まずは自己診断テストから始めたい。あるいは、関心や必要があるテーマから読み始めても良い。相互参照が充実しており、そこから発展させることができるのである。本書を通して英語リスニングの世界に浸り、その謎と面白さ、リスニング力を育成する確かな指導法を知り、明日からの授業に活用したいものである。

(いづみ えみこ・京都教育大学教授)

## 議論学への招待

建設的なコミュニケーション  
のために

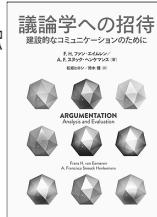
F.H. ファン・エイムレン、A.F. スヌック・  
ヘンケマンス 著

松坂ヒロシ、鈴木健 訳

A5判・256頁・  
本体2,700円+税

[評者]

宮川純一



### 議論を学ぶ「初めての教科書」

「議論」のスキルを我々は一体どこで学んだだろう。本を読み、TVの知識人の発言をまね、実際に同僚、上司と議論する中で、経験的に身に付けていったのではなかろうか。

では、我々の生徒たちは？ このスキルをますます駆使して、グローバルな世を渡っていかねばならないはずだ。スピーチやプレゼンテーションの能力向上も、議論のスキル向上も、教育に求められている。個人や集団だけでなく、国益や地球レベルで影響しかねない。友好や発展のため、またサバイバルツールとして。

「コミュニケーションの危機管理ができなければ、外国語がうまく使えることにはならない」（訳者）——なるほどと思う。

「論理・表現」という科目が今、形を成そうとしている。これまでの経験のなかで非効率的に身に付いたスキルから、体系的に合理的な手順で展開され習得されるスキルに。英語教員は「Communication」を教えることの意義を今一度立ち止まり深める必要がある。

議論やディベートは、もはやチャレンジではなく、むしろチャレンジを後押しするサポートであると再認識をさせられることにも

なるのではないか。

1～4章では、議論の立脚点、前提を明らかにする視点が養われる。5章では、論構造を図式化し並立型、連携型、重層型の分類を通して構造分析をし、6章ではさらに論構造式（その反論の式を含む）が示され、徵候、類似、因果の例示を通して論理自体を理解する。7、8章ではルール違反（誤謬）の10パターンで、歪んだ議論を見抜く力を持つ。9、10章で戦略的立ち回り方として効果的に論陣を張る手法を学ぶ。各ポイントに漏れなく例文、例題が付き、納得しながら読み進めることができる「伝統的なタイプではない」「初めての教科書」（著者）である。

各章末にある、訳者の松坂、鈴木両先生のコラム「ディベート的考え方」「ディベートの実践」が充実している。反論の余地のない状況打開に「議論を突き詰める」「矛盾」「比喩」はすぐ明日の会議でも役に立つ。「リサーチをする」では「知識を先に調べて、情報を後から調べる」「資料には5つのタイプがある」が大変参考になった。

本編の訳には、「うまく日本語が対応しないケースが多かった」とご苦労があったようだ。福沢諭吉が「議論」という言葉を初めて当たった時のような、そんな文化が開けていく気運を感じる。「口論や喧嘩ではなく、冷静な議論に強い人々が大勢出てきてくださることを期待しております」との訳者の願いに、時代が追い付くための「初めての教科書」となることを、私も期待している。

（みやがわ じゅんいち・

岐阜聖徳学園高等学校教諭）

## 英語の歴史から考える 英文法の「なぜ」

朝尾幸次郎 著

四六判・286頁・  
本体1,800円+税

〔評者〕

滝沢直宏



### 現代英語をより良く具体的に理解するための英語史

英語の教員が知識としてもっておくべき領域は多岐にわたるが、中でも英文法、英語史、調音音声学はその中核を占めると言えるだろう。本書は「文法」の「歴史」を取り上げた本であり、英語教員にとって不可欠な内容で満ちている。

本書の各章で扱われている事項は、高校までに習うものがほとんどであり、本書で取り上げられている事項を知識としてもっていれば、生徒が抱く「なぜ」の疑問に適切に答えられるようになる。

実際、中学で習う英語は「なぜ」の連続である。評者自身が英語を習った経験でも、「不定冠詞 an の n は何か」、「なぜ have to は義務を表すのか」など不思議なことが多かった。これらに答えが得られたのは、大学で英語史の授業を受けた時である。様々な制約があるので致し方ないが、高校までに知る機会があったら英文法をより体系的に理解できただろうに、と感じたものだ。著者は「現代英語の文法は過去の英語の歴史の積み重ねの上に成立したものです」と述べているが、だからこそ歴史が重要ということになる。

項目は多岐にわたるが、例えば

always の-s は何か、what は綴りとしては wh なのに [hw-] と発音するのがなぜか、says は [seiz] ではなく [sez] と発音されるのはなぜかなど、素朴な問題が多く取り上げられている。こうした疑問に答えられれば、学習者の知的好奇心、さらには言葉の仕組みや母語に対する関心も深まるだろう。

本書は、興味深い実例が満載されている。「聖書」から多くの例が取り上げられているが、さまざまな時代の版があって内容が同一なのだから英語の歴史を辿るには聖書は適切な素材だ。しかし、本書は、普通の小説や映画などからも例文を多数引いている。無味乾燥になりがちな文法やその歴史の話が実際に楽しく読めるという点は、本書の嬉しい特徴と言って良い。

本書で扱われているのは、狭義の文法だけではない。学習者を悩ませる綴り字の問題も歴史的観点から音声変化と絡めて扱われている。「英語の発音と綴り字の関係は不規則だとよく言われます。しかし、それは規則的に不規則なのです」という述べ方は妙に心に響いた。

章末の英語史に関する「こぼれ話」も興味深い。評者も、授業の際に紹介したいものばかりである。

本書は、現代英語が過去を引き継いで成立したものであるということを具体例によって理解することができ、それによって現代英語についての理解を深めるのに有益な書籍である。

（たきざわ なおひろ・

立命館大学大学院教授）